

書評と紹介

東洋史研究会編

羽田博士史学論文集 上巻、 歴史篇

羽田亨博士（一八八二—一九五五）が生前發表された八十余篇の論文・隨筆の類が、その門下諸氏の手によつて整理按排せられ、羽田博士史学論文集（二冊）として世に遺られることになった。ここに紹介する上巻歴史篇は即ちその第一冊である。七百八十四頁の本文と図版十一葉とから成る巨冊は、その美麗堅牢な装釘と鮮明細密な印刷と相俟つて、誠にこの碩学の論文集たるに適しい。この巻収める所凡べて三十三篇。主として歴史に関するものを類を以て排列してある。

第一類は蒙古史・元朝史に関するもので、特に駅伝制度がその中心をなしてゐる。これに属するもの五篇。

蒙古駅伝考

元朝駅伝雜考

站

成吉思皇帝聖旨牌

元朝秘史に見ゆる蒙古の文化

この中、「元朝駅伝雜考」は東洋文庫叢刊の一つ永樂大典（所収經世大典站赤の条）に附刊され、その後何健民氏によつて漢訳され文史季刊（六、六二五—六九九、八七三—九一八頁）に転載されたもので（cf. P. Olbricht, Das Postwesen in China unter der Mongolenherrschaft im 13. und 14. Jahrhundert, Wiesbaden: Otto Harrassowitz 1954 p. 93）、博士の駅伝制度研究の総決算とも言ふべき力作である。

第二類は唐代のウイグル民族史に関する研究で、次の三篇を数へる。

唐代回鶻史の研究

九姓回鶻と Toguz Otuz との關係を論ず

漠北の地と康國人

「唐代回鶻史の研究」はウイグル民族の勃興からその分散までの歴史を概観し、「唐代の回鶻君長治世年表」及びカラールバガスン所在の「九姓回鶻愛登里囉汨沒蜜施合毗伽可汗聖文神武碑考」を附録として掲げてゐるが、もと「唐代ニ於ル回鶻ノ盛衰」と題し、九姓

回鶻考及び下巻所収の「回鶻文字考」と共に学位請求論文として提出されたものである。

ウイグル語並びにウイグル民族史の研究は博士の最も力を注がれた所で、大正三年（一九一四）ロシアに出張し、ラドロフ氏と共同研究に従事されたのも、ラドロフ氏の招請に基づくもので、博士の大名と研究の成果とが露都に在つたこのトルコ学の大宗に異常な感銘を与へた結果であつた。当時我が国の新聞は筆を揃へて博士の榮譽を讃へたと聞いてゐる。ウイグル語と關係史料との研究は下巻に収録される筈であるが、これまで未刊の「唐代回鶻史の研究」がここに公にされたのは、北方民族史研究者にとつて頗る喜ぶべきことである。

第三類は遼・金及びチムール關係の論考四篇である。

遼金時代の糺軍に就いて

西遼建國の始末及び其の年紀

帖木兒大王

帖木兒と永樂帝―帖木兒の支那征伐の計

画―

糺軍の研究は「遼金時代の糺軍に就いて」と「再び遼金時代の糺軍に就いてを読む」の二

論文から成り、亂軍の名称・構成について箭内博士と論争されたもの。「西遼建国の始末及び其の年紀」は西遼成立史の最も重要な研究として、西遼のことを論ずる場合に必ず引用される論文であり (K. A. Wittogel and Feng Chia-seng, *History of Chinese Society, Liao, Philadelphia, 1949*, pp. 635, 639, 673) 馮家昇氏の漢訳が禹貢(五ノ七一九三六年)に掲げられてゐる。

第四類は中央アジア(新疆省)の探検、出土史料の解説・研究並びに研究史に関するものである。即ち

中亞探検

は、始め大阪朝日新聞に大正十一年十一月一日から七回に亘つて連載され、その後「新疆域記」下巻に附録として掲載されたもので、中亞探検の歴史と成果とを概説し、

敦煌の千仏洞について

敦煌千仏洞の營造に就きて

は、新疆省に於ける古文獻出土の一大中心である敦煌の千仏洞に関する説明であり、

亀茲・于闐の研究

輓近に於ける東洋史学の進歩

は、新出史料に基づく研究の紹介であり、

敦煌遺書活字本第一集解題

は、沙州地志残卷以下九種の敦煌出土文書の解題である。敦煌遺書第一集の影印本はよく知られてゐるが、それと同時に出了活字本の方は、何故か余りよく知られず、入手も困難であるので、解題だけでもここに採録されてゐるのは便利である。(しかし影印本附載の解説や一神論・序聽迷詩所經の解説が、假に一部分本文と重複するとしても、ここに一括されてゐたならば便利であつたであらう)。解題としてはこの他に四訳館則解題が収められてゐる。

慧超往五天竺国伝逐録

大谷伯爵所藏新疆史料解説

唐光啓元年書写沙州・伊州地志残卷に就いて

「興胡」名義考

は、それぞれ新出史料の移録・解説・研究と用語の考釈であり、

読書漫録

三則の中、第一則は摩尼教典の下部證に関するものである。第四類に於ける最も輝かしい研究は

大月氏及び貴霜に就いて

であらう。これは昭和五年五月の史学会大

会での公開講演で、史学雑誌に掲げられ、更に仏訳されて日仏公館館報 (*Bulletin de la Maison Franco-Japonaise*, IV, 1933) に発表された。博士がこの論文で主張せられた大月氏と貴霜とは異つた二つの民族と見るべきこと、所謂トハラ語Bはクチャ語と呼ぶのが正しいことは、正に不動の鉄案であつて、前者は漢文史料の正確な分析と理解が中亞古代史の研究に決定的重要性をもつてゐることを世界に示し、後者は新出土のウイグル語文獻解読についての博士の優れた能力を発揮したものであるとして、我等の共に誇るべき論考の一つと言はねばならない。この中大月氏と貴霜とを別の民族とする議論は、漢文の理解力の高いベリオ氏には早速全面的に受入れられたけれども (JA, 1934, p. 38) W. W. Tarn (*The Greeks in Bactria and India. Cambridge 1938* [1952], p. 284 n. 4), O. Maenchen-Helfen (JAOS, 65, 1945, pp. 71-81), L. Petech (*Le civilisatō dell' Oriente*, I, Roma 1956 p. 616), の諸氏は新説を反対して同一民族説を固守し、G. Haloun も懷疑的態度を持し (ZDMG, 1937, p. 257 note) 。

その他の人々は何の批判もなしに同一民族説

に従つてゐる。これらは何れも欧米の学者に細かい漢文の書法の理解が如何に難しいかを示してゐるであらう。(ドイツの F. Altheim, Weltgeschichte Asiens ins Griechischen

Zeitalter, 1, Halle 1947, p. 86 も羽田説に賛成してゐるが、アルトハイム氏は漢文を理解しない人であるので、どの程度新説を理解してゐるのか不明である。) 又、新出のウィグル文資料を利用して所謂トハラ語 B をクチヤ語と呼ぶことの正しさを実証された第二点は、レヴィ博士の所論に一層の確実性を与へたものである。何れにしても、この一篇が博士会心の論考であつたことは、後年度々これに言及して居られる事実から察せられる。

新出史料やそれに基づく新研究を縦横に駆使してイスラム以前の中央アジアの文化史に始めて正しい系統を与へられたのも博士で、その西域文明史概論や西域文化史は、日本に於いては勿論、世界に於いてもユニークな概説であるが、単行本として行はれてゐるので、ここには省かれてゐる。

最後に第五類として総合的概観的な論考八篇が収められてゐる。

隋唐時代の文化

元朝の漢文明に対する態度

支那の北族諸朝と漢文明

漢民族の同化力説に就いて

宋元時代概説

北方亜細亞に於ける遊牧民の社会的な生活

日本文化発達史上に於ける外国文化の影響

響

飛鳥奈良時代の文化綜説

これらは何れも精緻な研究を基礎に、該博な知識と高い識見とを以て組立てられたパノラマで、歴史家としての博士の面目をよく示してゐるものである。

以上の三十三篇は、長短難易、一様ではないが、その何れをとつて見ても、博士の一事を忽せにしない慎重さと、真理を追究して已まない厳正さが、行間に溢れてゐて、学問の厳しさを顔に吹きつけられる感じがする。博士は生前既発表の論文を訂正増補して纏めて出版する意図をもち、本文の削訂、欄外の書入れを行つて居られたが、公務の多忙と度々の重い病氣とがその表現を妨げ、自らの手による訂正増補は遂に完成を見なかつた。この論文集の刊行に當つて、編輯者は出来る限

り、博士の加へられた訂正や増補を活かすことに力め、時に編者の附注を添へて読者の理解を助けてゐる。さうした苦心の結果、博士晩年の定論が大体窺へるやうになつてゐて感謝に堪へないが、もし蜀を望むことを許されるならば、博士の多方面の研究をそれぞれの部門に於て受継がれてゐる門下の諸子が、各論考について学界のその後の研究をつけ加へて下さると、博士の業績の優れてゐることが一層はつきり判つてよかつたと考へる。例へば第一類の中核をなす站赤の研究について見ると、元朝駅伝雜考の出た昭和五年(一九三〇)にベリオの Sur Yam on jam, "relais postal" (TP, XXVII, 1930, pp. 192-195) が出一九三三年ロコニヤチ(W. Kotwicz)の Les termes concernant le service des relais postaux (Collectanea Orientalia, No. 2, Wilno, 1932, pp. 1 ff.; Rocznik Orientalistyczny, XVI, 1950, pp. 327-368) が出一九五四年には前に引いたオルブリ

ヒト氏の元朝駅伝考が現はれてゐるし、駅伝の牌子とその銘文の解説とについてはポャベ氏に Kvadratnaya pis' menost'. Istoriya mongol'skoy pis' menosti, T. 1, Moskva-

Leningrad 1941 があり、昨年その英訳が出た(N. Poppe, The mongol P² ags-pa-Script. Translated by John Krueger. Wiesbaden; Otto Hassowitz 1957)。これら後

出の諸論文は、白鳥博士や羽田博士が夙に取扱はれてゐる諸点を繰返したり、多少の訂正を加へたりしてゐる所が大部分であつて、「こと東洋史に関する限り日本はこの国にもひけを取らないよ」(三島海雲氏「羽田博士の思い出」、東洋史研究、十四ノ三、三八頁)と豪語された博士の面目は、こうした比較によつて一層躍如として来るであらう。

最後に一言したいのは論文の排列の仕方である。歴史篇と宗教言語篇とに二分することもある。一方法であるが、羽田博士の特色の一つは新史料の紹介にあり、博士自らも論文はとにかく史料紹介の労は認めて貰はねばならぬと語られてゐたと側聞する。従つて論文集も論文と史料解説との二つに分けた方がよりすつきりとしたのではなからうか。(昭和三十三年十二月、東洋史研究会発行、定価千六百円)

榎 一雄

赤松俊秀著

鎌倉仏教の研究

一

本書を手にして我々は深い感慨をおぼえる。巻頭の「覚信尼公について」が、本誌第十八巻第四号の巻初にかかげられたのは、今をさる二五年前の昭和八年であつた。当時真宗の教界は、本願寺の事実上の定礎者である親鸞の季女覚信尼の六百五十年忌をいとなみ、因んでその伝を二三刊行したのであるが、説縦横にいろいろだれて論難まことはげしく、はては感情的な様相すら呈して全く拾取つかぬ状態となつていた。このような時、當時大学院在学中の著者が、右をひつさげて登場したわけであるが、文字通りさつそうたる出陣であり、後述する如く双方の立論の根底をくつがえしたので、諍声もおのづからしづまらざるを得なかつた。爾來今日に至つて覚

信尼引いてはその父親鸞の後半生を考えるものは、これを基点とせねばならなくなり、筆者の同誌の如き、宗門内の人手を転々して手垢にまみれ表紙を失つてしまつてゐる。「一

遍上人の時宗について」は、敗戦の色こき昭和十九年の発表であるが、筆者自身、勤員学徒の工場の、燈火管制下うすぐらい寮の一室でよみはじめ、よみ進むにつれ高まる感激をおさえることが出来なかつたことを思い出す。仏教史上の一遍、時宗の地位に関する着実な論証はともかく、その関連に於て、初期真宗史に加えられたその卓抜な見解に、やがて教界はどよめいた。即ち少くとも以上の二篇についてだけでも、教界は早くよりその成書を待望していたのである。

二

さて本書は、一、「親鸞をめぐる諸問題」、二、「一遍について」、三、「慈円と未来記」の三部と附篇「御影堂について」の諸篇よりなつてゐる。一には「覚信尼について」「いまこせんのほはについて」「親鸞の消息について」「初期真宗教団の社会的基盤について」「教行信証(坂東本)について」「師子身中の虫と諸仏等同について」「親鸞像について」「西本願寺本親鸞伝絵について」「鏡御影の賛について」の九篇をおさめ、二には「一遍上人の時宗について」「時宗芸術史上の一・二